

A Comprehensive Review of Cizek Lessons 1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/630

チゼック授業の特徴と課題 I

—CLV 1～10にみるクリスマスの祝祭と登場人物の表象をめぐる (その1)

山田 一 美

A Comprehensive Review of Cizek Lessons (I) : On CLV Number 1—10

Kazumi YAMADA

I. ヴィオラの授業記録を再検討する

今世紀の子どもの美術教育を振りかえるとき、「児童美術 (Child Art/Kinderkunst)」によせたチゼック (Franz Cizek, 1865—1946) の主張と、彼のウィーンでの「青少年美術教室 (Uvenile Art Classes/Jugendkunstklassen)」の実験的実践を看過することはできない。このクラスの子どもたちの作品はイギリスのギャラリーで展示され、展覧会は大好評のうちに1935年まで定期的に続けられた。またこの展覧会はフランスやアメリカでも同様に組織され、多くの教師たちを啓発していった。そして第一次大戦終了直後からナチスがオーストリアを併合するまで、イギリスとアメリカを中心に何千もの訪問者が青少年美術教室を視察に訪れている。このときの彼の主張と実践を記録し、福音書記者としての役目を果たしていったのがヴィオラ (Wilhelm Viola, 年代不詳) であった。彼は、1934年以降、さまざまな大学や教育カレッジ、教育協会などで講演を重ね、何千人もの教師たちを相手にチゼックの美術教育哲学を啓蒙しつつ続けた¹⁾。そして、彼の克明な授業記録はチゼックの偉業と方法を包括的に解説する古典的テキスト、*Child Art*²⁾ (英語初版本, 1942) として発行されている。しかし、同時にそれはチゼックの主張や理念とその実際の指導方法との間に大きな隔たりがあるのではないかという疑念を生み出す証拠を書き記すものでもあった。また第二次大戦後、チゼックの偉

業が世界的に知れわたるにつれ、指導した児童作品の善し悪しについて多角的に注意深く検討される状況に変わりつつあった。その結果、チゼックの実像を描き出した彼の著書に対し、チゼック授業に対する読者からの厳しい異議申し立てがヴィオラに多数寄せられてきた。それから2年後に上梓された第二版 (1944) の末尾にはヴィオラ自身が、こうした批判者の意見を所収し、その一部について反駁するという現象さえ現れている^(表1,3)。このヴィオラの応対ぶりは彼自身の良心とチゼック理念に対する確信のあらわれにほかならないものであろう。それほどまでに論争に盛り上がりを見せたのは「授業内容」という教授過程に目を向け、それを記録したヴィオラの功績によるものである。しかし、結局はチゼックの理念と実践に対して多くの教師たちが共鳴、陶醉しながらも、やがてその理想と現実の乖離の大きさに反発を覚えて離反していく展開をみている。

こうした動向は日本においても同様であった⁴⁾。とくに第二次大戦後の日本の美術科教育はチゼックの教育主張に強く刺激され、彼の主張する理念を一方的に拠り所とした、あるいは理念を全面に唱った民間教育団体や授業実践が繰り広げられた。それはチゼックが20世紀の新教育運動における美術教育の実証という大きな課題を背負い込み、その理念を高々に標榜しただけに、多くの教師にとって彼の教授法に対する関心はきわめて高く、また期待と賞賛が入り交じった求心力に支えられ、深く浸透していっ

表1 初版 CHILD ART に対する視学官の指摘とヴィオラの回答

視学官の指摘項目	指摘される具体的事例	ヴィオラの回答
1. 細部についての固執	<ul style="list-style-type: none"> 靴の金具 (182頁) 髪・眼 (183頁) クリスマスツリー (187頁) りんごの木 (210頁) 	<ul style="list-style-type: none"> チゼックのときどき行なう細部への強調(例えば12頁)は一部、余白をうめさせようとする激励であたと考えられる。
2. チゼックは先のグループの子どもの絵画作品を展示する。	*1)・「これらの絵は前のクラスの人々が描いたのだが、君たちが上手に絵を描くための参考になるでしょう。」(183頁)	<ul style="list-style-type: none"> 教室にはいつも児童画の作品が満ちあふれていた。 子どもたちは絵にかまわれていた。まれではあったがチゼックが前のクラスの子どもの制作したそれらの絵をみせるときには次の目的があった。彼らにこれくらいなら描けるという自信を与えることで、写させたさせるためのものではなかった。
3. 児童画作品に対するたびたびの反動的批評。しかもそれは自然の事物に十分に「似て」いないという見地からなされている。	<ul style="list-style-type: none"> 馬のひづめ (217頁) サンタクロースの脚が変に曲がっている(186頁) 「顔を青にしていけない」(235頁) 	<ul style="list-style-type: none"> チゼックはいつも写真には反対した。・・・ひづめについての注意を次のように結んでいる。「君たちはつもね、ねのがどんな形であるかを考えなくてはいけませんよ。」・・・ともかく「描画」は非常な集中を要求して行なわれた。したがってことばだけからみると悪い印象を与えることがある。
4. 作品、しつけについてのチゼックの固執。	<ul style="list-style-type: none"> 「T君は一つのこと集中しない。すれぼうまくやれる。」(201頁) 子どもが家でせつせと描くように求めていること(205頁) 「トルードは以前は大そう勤勉だった。……なのに今では彼女の表現は弱くなってきているんだ。」(216頁) 「Sはきょうは頑張ったな。だからいつもよりよく仕上がっている。彼女は人を少し上手に描くことだけは勉強せねばならんね。」(223頁) 「このごろの生徒は誰もほとんど絵をもってこないと話した。私は外国からの多くの お客様の前でこんなことをいうのが恥ずかしかったね。」(245頁) 	<ul style="list-style-type: none"> チゼックの学校には極めて楽しい雰囲気があったが制作のしつけと訓練がすべてであった。 チゼックは個々の児童をみて指導した。あまり著しい批評のもつ危険はよく知られているが、放置よりは有効なのだ。 ただし批評は積極的(賞賛であるべく批判、叱正ではないのがよい)でなければならぬし、みさかいたなくすべての子どもにしてよいものでもない。
5. 彼はひとりの子どもの作品を他の子どもの作品と比較している。これはしばしば子どもを傷つける。	<ul style="list-style-type: none"> *2-1)・「これはCさんによって描かれたものでたいへんよいが、彼女はブラシで線をうまくたどってはいない。これはあまりにもひどい。」(194頁) *2-2)・「F君はいつもこのことを心にとめておきなさい。彼は人物を色の中に埋めてしまわずに、バックから浮かびだすようにしなければならなかったんだ。マリオン作品は美しいね。なぜだろう?それは彼女の絵では人も木もバックからはっきり浮き出ているからです。」(203頁) 	<ul style="list-style-type: none"> チゼックはクラス全体が同じテーマで描いたときやクラスのほとんどが同じテーマを描いたときにはときどき比較を行なった。 チゼックは比較が有害でないことをよく知っていた。
6. 子どもの絵をとりあげてこの段階にあるとか、あの「段階」に属するという注釈はそもそも児童にあてられているのか、それとも訪問者にかまたは学生用か、誰になされているかについて私はとまどう。	*3)・「この馬はすいぶん変わっているね。馬車は第四か第五の成長段階を示している。だけれども馬はまだ第一の段階だし車輪はまるきりコビイだね。ほかの馬もみないよ。第二の段階だがね。正しい段階で表現すれば脚の間の距離はみんな等隔のはずだ。」(200頁)	<ul style="list-style-type: none"> 「レッスン」中の彼のかなりの批評は訪問者に向けられていた。しばしば子どもの頭越しにある意図を含めて批評もしていた。

*1), 2), 3)は視学官の指摘項目を手がかりに筆者が『チゼックの美術教育』(久保貞次郎・深田尚彦訳, 昭和51年)から選び、視学官による指摘内容の事例として抽出した。

表2 チゼック授業の実施歴と CLV 番号

授業実施暦 (年月)	(日) 月 火 水 木 金 土	CLV番号・授業実施日 (54回) 1935年11月30日~1937年6月15日
●1935年 10月	6 7 1 2 3 4 5 13 14 8 9 10 11 12 20 21 15 16 17 18 19 27 28 22 23 24 25 26 29 30 31	
11月	3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 ⑩	CLV(1): 11月30日(土)
12月	1 2 3 4 5 6 ⑦ 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 ⑪ 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	CLV(2): 12月7日(土) CLV(3): 12月21日(土) CLV(4): 12月24日(火) あるいはその前後
●1936年 1月 (うるう年)	5 6 7 8 9 10 ① 12 13 14 15 16 17 ② 19 20 21 22 23 24 ③ 26 27 28 29 30 31	CLV(5): 1月11日(土) CLV(6): 1月18日(土) CLV(7): 1月24日(金)
2月	2 3 4 5 6 7 ④ 9 10 11 12 13 14 ⑤ 16 17 18 19 20 21 ⑥ 23 24 25 26 27 28 ⑦	CLV(8): 2月1日(土) CLV(9): 2月15日(土) CLV(10): 2月22日(土) CLV(11): 2月29日(土)
3月	1 2 3 4 5 6 ⑧ 8 9 10 11 12 13 ⑨ 15 16 17 18 19 20 ⑩ 22 23 24 25 26 27 ⑪ 29 30 31	CLV(12): 3月7日(土) CLV(13): 3月14日(土) CLV(14): 3月21日(土) CLV(15): 3月28日(土)
4月	5 6 7 8 9 10 ⑫ 12 13 14 15 16 17 ⑬ 19 20 21 22 23 24 ⑭ 26 27 28 29 30	CLV(16): 4月4日(土) CLV(17): 4月18日(土) CLV(18): 4月25日(土)
5月	3 4 5 6 7 8 ⑮ 10 11 12 13 14 15 ⑯ 17 18 19 20 21 22 ⑰ 24 25 26 27 28 29 ⑱ 31	CLV(19): 5月9日(土) CLV(20): 5月16日(土) CLV(21): 5月23日(土)
6月	7 8 9 10 11 12 ⑲ 14 15 16 17 18 19 ⑳ 21 22 23 24 25 26 ㉑ 28 29 30	CLV(22): 6月6日(土) CLV(23): 6月13日(土) CLV(24): 6月27日(土)
7月	5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	
8月	2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	

9月	6 7 1 2 3 4 5 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	
10月	4 5 6 7 1 2 3 11 12 13 14 15 16 ① 18 19 20 21 22 23 ② 25 26 27 28 29 30 31	CLV(25): 10月10日(土) CLV(26): 10月17日(土) CLV(27): 10月24日(土)
11月	1 2 3 4 5 6 ⑦ 8 9 10 11 12 13 ④ 15 16 17 18 19 20 ① 22 23 24 25 26 27 ② 29 ⑧	CLV(28): 11月7日(土) CLV(29): 11月14日(土) CLV(30): 11月21日(土) CLV(31): 11月30日(月)
12月	6 7 1 2 3 4 ⑤ 13 14 15 16 17 18 ② 20 21 22 23 24 25 ⑨ 27 28 29 30 31	CLV(32): 12月5日(土) CLV(33): 12月12日(土) CLV(34): 12月19日(土)
●1937年 1月	3 4 5 6 7 1 2 10 11 12 13 14 15 ⑨ 17 18 19 20 21 22 ⑥ 24 25 26 27 28 29 ③ 31 ⑩	CLV(35): 1月9日(土) CLV(36): 1月16日(土) CLV(37): 1月23日(土) CLV(38): 1月30日(土)
2月	7 1 2 3 4 5 6 14 8 9 10 11 12 ⑬ 21 22 23 24 25 26 ④ 28 ⑰	CLV(39): 2月13日(土) CLV(40): 2月20日(土) CLV(41): 2月27日(土)
3月	7 1 2 3 4 5 ⑥ 14 8 9 10 11 12 ③ 21 22 23 24 25 26 ⑩ 28 29 30 31	CLV(42): 3月6日(土) CLV(43): 3月13日(土) CLV(44): 3月20日(土)
4月	4 5 6 7 1 2 ③ 11 12 13 14 15 16 ⑩ 18 19 20 21 22 23 ⑦ 25 26 27 28 29 30 ④	CLV(45): 4月3日(土) CLV(46): 4月10日(土) CLV(47): 4月17日(土) CLV(48): 4月24日(土)
5月	2 3 4 5 6 7 ⑧ 9 10 11 12 13 14 ⑤ 16 17 18 19 20 21 ② 23 24 25 26 27 28 ⑨ 30 31	CLV(49): 5月8日(土) CLV(50): 5月22日(土) CLV(51): 5月29日(土)
6月	6 7 1 2 3 4 ⑤ 13 14 15 16 17 18 ② 20 21 22 23 24 25 ⑨ 27 28 29 30	CLV(52): 6月5日(土) CLV(53): 6月12日(土) CLV(54): 6月19日(土)
7月	4 5 6 7 1 2 3 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	
8月	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	

表3 ヴィオラ記録によるチゼック54授業の内容

CLV	年月日(曜日)	チゼック54授業の内容
1 2	■ (1935年) 11.30 (土) 12. 7 (土)	●サンタクロースとクラムパスをかく (その1) 同上 (その2)
3 4	12.21 (土) 12.24 (火*) あるいは前後	●ツリーを飾る小さな家 ●クリスマスの祝祭 (児童美術と永遠の法則) <親たちへの期待と協力>
5 6 7 8 9 10 11	■ (1936年) 1.11 (土) 1.18 (土) 1.24 (金) 2. 1 (土) 2.15 (土) 2.22 (土) 2.29 (土)	●「冬の楽しみ」を描く ●四角形の中にやさしいものをペンで描く ●馬・馬車をペンで描く ●一番美しいものを筆で描く ●カーニバルの美しい馬車を描く (その1) ●同上 (その2) ●絵本「リンゴ物語」をつくる (4部構成)
12 13 14 15 16	3. 7 (土) 3.14 (土) 3.21 (土) 3.28 (土) 4. 4 (土)	(その1) リンゴの木と子ども達 (その2) リンゴを載せて町に行く馬車 (その3) リンゴを売るお百姓さんの場面 (その4) その後の結末の場面 ●美しい色にあふれた春の絵を描く ●好きなものの絵を自由に描く <イースターのため休み?>
17 18 19	4.18 (土) 4.25 (土) 5. 9 (土)	●春を見に来た人々 ●春のまつり [※Tに「ネーガス」] ●エチオピアのネーガスに捧ぐ
20 21	5.16 (土) 5.23 (土)	(その1) エチオピアのライオン (とネーガス) (その2) エチオピアの王様 (「玉座に座るネーガス」) ① (その3) 前回の続き ② 来訪者を交え「ネーガス」の絵について話し合う
22	6. 6 (土)	●さくらんぼのなった桜 (その1/下絵)
23	6.13 (土)	●「小さな絵」をかく (エリザベットの練習帳のような花の祭り) ----- <第1グループ> 山・小さい家・太陽・庭園・噴水・働く人・犬・山羊・羊・鶏など
24	6.27 (土)	●喜び勇んで学校から帰っていくところ
25	10.10 (土)	<古参児童> ●例えば「学校の第1日め」「馬車で町へ行く親たち」を描く (その1/下絵)
26	10.17 (土)	同上 (その2/彩色)
27	10.24 (土)	●人・草花・リンゴの花・蜜蜂などを描く
28	11. 7 (土)	<経験児童グループ> ●自分でテーマを選び大きく描く (その1/下絵) (その2/彩色) (その3/彩色) (その4/2人の人間を並べて描く)
29	11.14 (土)	
30	11.21 (土)	
31	11.30 (月*)	
32	12. 5 (土)	●「小さい人形」を粘土でつくる
33	12.12 (土)	●「動物」を粘土でつくる <年長> ●子どもを叩くクラムパスを描く
34	12.19 (土)	●「人の形」を粘土でつくる
35 36	■ (1937年) 1. 9 (土) 1.16 (土)	●長方形の中庭・家・家畜舎などを描く (その1) 同上 (その2/下絵を完成する) ※<10-14歳クラス児童に> ●カーニバルの2人

37	1.23 (土)	●「樹木」を描く
38	1.30 (土)	●「スタウデック先生、25周年のお祝い」を描く
39	2.13 (土)	●成績をもらって学校から帰ってくる子供たちを描く
40	2.20 (土)	●自動車を描く
41	2.27 (土)	●飛行機を描く
42	3.6 (土)	●1) 町の通り(道路)にまつわるお話(事件)を描く 2) 前回の課題「飛行機」の今後の進め方について
43	3.13 (土)	●「春の花」(描いてから4色の絵具で好きにぬる)
44	3.20 (土)	●1) 前回課題「春の花」の批評(あるいは「自動車」「飛行機」を含めて) ●2) 「上から見た乳母車」を描く ●3) 「春の景色」もしくは「復活祭の遠足」を描く(山・搾乳場)(その1) (その2) 前課題「山・搾乳場」に「レストラン・道」を加える
45	4.3 (土)	●「大雷雨と人、犬」を空想で描く
46	4.10 (土)	●「マハラージャと象、じゅうたん、装飾を描く」(その1/下絵)
47	4.17 (土)	同上(その2/彩色)
48	4.24 (土)	1) 同上(その3/彩色)
49	5.8 (土)	●2) ツェペリンの爆発と人々(その1) 同上(その2)
50	5.22 (土)	●美しく輝く太陽の絵を描く(興味あるものを加えて)
51	5.29 (土)	●「道路上の生活」を楽しそうに描く
52	6.5 (土)	道・人間(男女)・子供・犬・自動車・自転車のりなど、)
53	6.12 (土)	●1) 「室内(その1)」(「子供が起きるところと洗面」)
54	6.19 (土)	●2) 「正面向きの牛の頭」 ●「室内(その2)」(「服を着ているところ」)

* CLV(23)から授業はしばらく複式学級となっている。

たからである。そして、日本におけるチゼック教授法に対する懐疑的な姿勢が具体的にかつ実証的に現れるのは、このヴィオラによる *Child Art* が『チゼックの美術教育』として日本語に翻訳された昭和51年(1976)以降のことではなからうか⁵⁾。この出版を契機にチゼックに対する美術教育者からの厚い眼差しは色あせたものとなり、ある意味で客観的な「等身大のチゼック探しの時代」に入ってきたとみてとれよう。こうした展開のなかで東京・子どもの城で開催された『フランツ・チゼック展』⁶⁾とそのシンポジウム、それに続く石崎和宏氏の『フランツ・チゼックの美術教育論とその方法』⁷⁾の研究成果は、チゼックの理念と実践の実像を総合的な視点から問いただすものとなり、チゼック授業の実像を探るうえで記念すべき偉業ともなった。これらのチゼックに関する実証的な姿勢や調査、資料公開が基盤となって、チゼックの教授法についての新たな研究の可能性、発展性というものが拓かれてきたと言えるだろう。さらに美術科教育の視点からみると今日、実践的視座からの美術教育研究が強く求められ、ヴィオラが記録した54回のチゼック授業はその点からしても多くの話題を提供してくれるもの

と予想される。わけてもその授業内容の魅力はチゼックと子どもたちの生々しい「やり取り(対話)」にある。それらには躍動感がみなぎり、50年前の息づかいがいまだに見事に伝わってくるほどである。今日まで50年という歳月が流れ、チゼックの教授法についてはすでに数多くの指摘を見てきたように、彼の授業内容は多くの点で指導上、子どもにとってふさわしいものとはばかりとは言えない。しかし、われわれはこの中にこそ、真のチゼックの教授法の実像と特質を読み取れ、21世紀の美術科教育の実践学的研究の検討材料として発展させることができる素材であると考えられる。それはまた同時に、チゼック授業を記録したヴィオラの観察眼を推し量り描き出すものであり、彼の美術の授業を対象とした授業研究に先進的なアプローチの仕方に目を向けることにもつながっている。

ともあれ、チゼック授業とはいったい何であったか。その実践から50年を経て、今日のわれわれに何を指し示してくれるのか。チゼック授業をもう一度丹念に読み解いていく作業を通じてこそ、この結論を得られるものと考えられる。本研究はこうした動機と方向性を見定め、チゼック授業の内容を総合的に分析、解釈していこう

とするものである。

II. チゼック授業の分析・解釈のための基礎的資料構成

本研究の分析・解釈の対象となる一次資料を、英語版 Viola, W., *Child Art*, (1942) 初版に所収される第12章 "Cizek - Lessons" (pp. 112-191) に置いた。ヴィオラの記録ノートは独語であると思われるため、本来ならばその記録を一次資料として充てることが望まれる。しかし、現時点では、それに該当する資料を欠いているため、世界的に普及しているヴィオラの古典的名著を本研究の一次資料としたい。この英語版はすでに和訳され刊行されている。しかし、あえて本研究ではヴィオラの英語初版本(1942)に立ち返り、それを再訳し、54の授業にそれぞれ通し番号を付していった。1935年11月30日～1937年6月19日までの各授業は、通し番号の略号として CLV を用いている (CLV: *Cizek - Lessons reported by Viola* の略号)。(表2)はその一覧である。以後、チゼック授業に関する筆者の論考では引用の便宜をはかるために CLV 番号を使用する。

さて、チゼック授業には各授業の内容を代表する表題が示されていない。表題にかわり冒頭に記載されているものは授業の実施年月日のみである。各授業の対話の内容から判断すると、各授業内で何をモチーフに表現させるかについてチゼックが授業前に何かを意図していたことは明らかである。しかし、ヴィオラはこれを記載していない。この事実をどうみるか。チゼックは、授業内容の特質である「想像すること」「連想すること」の性質上、子どもの思わぬ「想像したこと」に彼自身が触発されて、その展開に合わせていったのではないか。あるいは寄り道でもしていくかのように、自由に発展させ展開させていったと想像されるのである。ヴィオラはそうした場面を随所に読み取り、チゼックに授業の表題について説明を求めるよりも、む

しろ積極的に「授業展開のありさまをあるがままに記録する」ことに専念し、そのスタンスを保持しようとしたのではないか。チゼックと子どもたちの対話の進行によって、表す内容がその場で変容したり、飛躍したりしていく展開を見て、ヴィオラは初めから授業内容を示すタイトルを付すことに難しさを実感したのかもしれない。

いずれにしても、チゼック授業を分析、解釈する今後の研究の性質上、授業内容をある程度把握できるように要約したもの、つまり授業の表題というものを付した方が便利であると考えられる。そこで、授業記録を通読し、授業内容を表す表題を(表3)のようにまとめてみた。この表を見てわかることは CLV (23)～(36)までの14回は他の授業構成とは異なり、クラスがグループ分けされ複式に展開されている。この点についての考察はいずれ別稿で述べることにしたい。

つぎに各授業内におけるチゼックと子どもたちの対話及びヴィオラの観察記録に対し、発言(行動)番号を付した。また、文意からディスコース(対話の固まり)がわかるように行間を挿入した。(資料1)は CLV (1)を前述の手順にしたがって組み替え、操作したものである。これらの作業により、新たに幾つかの問題点が生じることは否めない。分析・解釈のために利便を図れば図るほど、「生の授業の息づかい」はどこかで損なわれてしまう。われわれはその点を踏まえつつ、ヴィオラの記録を操作する必要があるだろう。この手続きにより生じる

① [動詞, 動詞+前置詞]	do	}	draw	「かく」「描く」
	make		paint	「下書きをする」 「ぬる」「かく」 「着色する」
		表現する(表す)		「彩色をする」 「色をぬる」 「描き込む」 「かき入れる」
	put in (into)	}		
	work into			
② [助動詞]	must	}		「しなさい」
	should			「すべきである」 「しなければならぬ」
	should not			「してはいけない」
③ [人称の性]	I (me)			「はく(わたし)」

表4 Cizek-Lessons に対する操作の得失

操作内容	利点	課題
通し番号 (CLV) をつけること	各授業を特定しやすい	・CLV(4)は「クリスマスの祝祭」であり、クリスマス・ツリーを前にして子どもたちと両親に対するチゼックのお話(講演)であり、授業として位置づけられないこと。
授業内容の表題をつけること	各授業の内容を理解しやすい	・結果として記録された授業内容が、どこまでチゼックの意図したところかを把握しにくいこと。 ・その日の授業内容が前回の授業内容を引き継いでいたり、途中から新しい課題に入ったりする場合があります複雑であること。 ・CLV(23)~(36)が2グループに分けられ、授業内容の把握と表記がむずかしいこと。
チゼックと子どもたちの発言番号をつけること	各授業にまたがって発言を抽出しやすい	・記録を通読しにくくなること。 ・ヴィオラ自身がすべての発言者を特定できるように記録していないこと(チゼックの発言はわかるが、子どもたちは誰なのか理解できない)。 ・ヴィオラは対話を直説法で記録したり、また間接法で記録したりして発言番号をつけることができない箇所があること。

得失を以下のようにまとめてみた(表4)。また、チゼック授業の原文和訳に当たっては前頁に示すように英和対応を基本的にあてはめてみた。

III. クリスマスの祝祭と登場人物をめぐる問題

1. サンタクロースの図像

チゼック授業の全体を通じて現れる特徴の1つは、チゼックが子どもたちに「想像すること」を強く求めながら実践を繰り返しているところにある。したがって、本稿ではこの「想像すること」を念頭に置き論をすすめたい。一般にわれわれが「想像する」ためには、あるモノ・コトの印象や経験の断片が必要であり、それらが前提条件として整ってはじめて想像することが可能となる。こうした過去の経験とか、あるいはその場での経験の断片が想像するための素材となっている。しかし、この素材となるべき経験や印象が、個々の文化的背景の違いにより基本的に差があるとすれば、多くの人々が集い、その場でイメージを共有することはこのほかむずかしい活動となる。このことは子どもたちが集まる学級に当てはめても同様である。ではチゼックは、青少年美術教室において、文化的背景の異なる子どもたちを前にいったいどのようにしてこの点を解決しようとしたのか。

また、それをすすめる過程においてどのような問題点が生じていたのだろうか。

チゼック授業 CLV(1)~(5)の授業記録に第一の疑問点は、クリスマスの祝祭におけるサンタクロースとクラムパスのイメージをめぐる問題である。幸運にもこの問題を解く手がかりは、CLV(1)のヴィオラ自身による脚注に残されている。彼自身が読者に対し、こうした文化的背景の異なる問題点を懸念してか、本文中の初出の用語「クラムパス」について次のように注釈をつけ説明している。

「クラムパス (Krampus)」とサンタクロース (Santa Claus) は12月5日の晩に子どもたちのところにやってくる。「クラムパス」は悪魔 (devil) であり、サンタクロースは立派な司教様 (bishop) である。これは一種のクリスマスの子祝であり、ローマカトリック教諸国の子どもたちの実生活の中では一大行事である。サンタクロースはよい子どもたちのところには果物とお菓子 (fruits and sweets) をもってくる。「クラムパス」はいたずらな子どもたちを鞭などで打つと考えられている。「クラムパス」と「ニコロ (Nicolo)」(オーストリアではサンタクロースと同じように呼ばれる) に変装した男たちは、幼い子どものいる家族を訪れるのが常であった。そして商店、とりわけ菓子店は白いサンタクロースと赤い「クラムパス」でいっば

いに飾られる。(Viola,p.112.)

つまり、オーストリアでは12月5日の晩に予祝として行事が行われていることがわかる。その行事にサンタクロースとクラムパスが子どもたちのもとにやってくるということをヴィオラはここで説明している。さらにサンタクロースは別名「ニコロ(Nicolo)」と呼ばれ、また司教であるという。一方、クラムパスは悪魔であって躰を守らない、ききわけのない子どもたちを「鞭」で打つというものである。

こうした特徴はすでにわれわれ日本文化のなかのサンタクロースの表象と大きくずれている。日本では、サンタクロースは大きな袋にプレゼントをいっぱいにつめ、トナカイの引くそりに乗って12月24日のクリスマス・イヴに、家々の煙突を通して子どもたちの寝ているところにやってくる、あのお馴染みの容姿と振る舞いを想像しがちである。この表象は、その輸入元であるアメリカでも共通点が多い。ではヴィオラはなぜ、この点について注釈をつけなければならなかったのか。その理由の1つはチゼック授業の実践がオーストリアのウィーンでなされ、それをヴィオラが記録してプロテスタント圏のイギリスにおいて出版したことにありそうである。そして、われわれ日本のサンタクロースにまつわる習俗は、戦後史をひもとくまでもなくプロテスタントの多い多民族国家のアメリカから受容されたものであり、今もその影響下にあると言わざるをえない。われわれは、チゼック授業におけるチゼックと子どもたちの対話内容を理解し、サンタクロースのかかわるクリスマスについて文化背景の違いから生じやすい誤解や憶測をできるだけ避けるために、こうした行事の内容に深く立ち入り、再検討しておく必要があるのではなからうか。

そこでチゼックの分析と解釈の手始めに、CLV(1)~(5)のサンタクロースに関係する人物や事項を整理する作業を行った。以下、問題点がある対話を①~⑤まで取り上げ考察してみた

い。まず、「サンタクロース」と「ニコラウス」の表象が錯綜している対話場面である。

① [サンタクロースとニコラウスの表象が錯綜する場面；CLV(1)より]

サンタクロースはどんなふうに見えるかな？

●子ども(09)：マイター(司教冠)をかぶっているよ。

●子ども(10)：それにロング・コートを着ている。

●チゼック(06)：そうとも、ロング・コートだ。しかし、君たちは頭から始めなければならない。

彼の頭はどんなふうに見えるかな？

●子ども(11)：人間の頭のよう。

●チゼック(07)：彼はどんな類の頭をしているかな。

●子ども(12)：とってもへんな頭。

●チゼック(08)：彼にはながーい あごひげと、白くて美しい髪の毛がある。

●子ども(13)：ちがう。そう思わない。

●チゼック(09)：彼は頭の上に何をつけているな？

●子ども(14)：マイター。

●チゼック(10)：君はマイターがどんなふうに見えるか知っているかい？でも君は説明するよりももっとうまく描くことができる。誰かマイターを説明できる人は？

●子ども(15)：はい。

●子ども(16)：はい。

●子ども(17)：はい。

●子ども(18)：司教様みたい。

●子ども(19)：アーチがあって、下の方でくっついていて、それからっぺんは十字形で、それからそれでぜんぶ。

チゼックはサンタクロースが「どんなふうに見えるのか」を想像させている。それに答えて子どもは「司教冠をかぶり」(09)、「ロング・コート」(10)を着ているという。このイメージは

伝統的な「聖ニコラウス」の表象である。それを受けて、チゼックは「彼にはながいあごひげと、白くて美しい髪の毛」があることを子どもたちに確認した。しかし、問題は次の子ども(13)の反応である。この子どもは「ちがう。そう思わない。」と答えている。この子どもにはどんな「過去の印象や経験」があったのだろうか。この子が天の邪鬼な性格からわがまま三昧に答えたのでないものとして考えると、この子どもには「生きている聖職者としての司教像」のイメージがあったのではないか。つまり、図像化されている「聖者ニコラウス」には髯は見られるが、カトリックの聖職者は無髯を常とした場合もあるからである⁹⁾。

あるいはまた、「聖ニコラウス」の肖像が年老いた像でなく、若いニコラウスの表象を思い浮かべた場合には「ひげは黒い」のである⁹⁾。さて、この場面ではどうか。可能性の高さから言えば、子どもは「聖者ニコラウス」よりも、実生活の中で目の当たりにする「カトリックの生きた聖職者」の違いに気づいていたのかもしれない。「司教様みたい」と子ども(18)が言うように、「サンタクロース」のイメージは、「聖ニコラウス」像と「カトリックの司教」像など複雑に絡み合ったイメージのなかで対話が成立しているのである。

同じように次の対話場面においてもサンタクロースのイメージに混乱が見られる。

② [CLV (1) より]

●チゼック (22) : 君たちはこのことについて考えなくちゃね。もしサンタクロースが何かを運ぶときには、ものを持って運べるだけの手を持たなければならないね。片手は何を持っているのかな？

●子ども (29) : 大きいふくろ。

●子ども (30) : ぼく(わたし)の絵では、サンタクロースが杖をもっていない。

●子ども (31) : ぼく(わたし)のはちがってる。

チゼックの問いに「大きいふくろ」と答えた子どもは袋のなかにプレゼントをいっぱい詰めて子どもたちのところにやってくるサンタクロースをイメージしていた。この点はチゼックの思惑どおりである。しかし、子ども(30)は「サンタクロースが杖をもっていない。」と答え、子ども(31)は「杖を持っている」ことを匂わせている。この場面の杖とは「司教杖」であり、その意味から杖をもつ聖ニコラウスのイメージが支配的である^(図版①)。これに対して「大きいふくろ」を持つことがイメージされるものは、訪問神として年に一度子どもたちにプレゼントをしに家々に訪れる、現代的な、あの「やさしいサンタクロース像」である。

授業中の対話にはもう一カ所、子どもたち同士でサンタクロースの表象が拮抗している場面がある。

③ [サンタクロースは生きているか；CLV (2) より]

ぬりたいところをまず黄色でぬりなさい。手際よく！ 私たちは今日、「グラムパス」を表さなくてはならない。さあ、ぬり始めよう。サンタクロースは待ちくたびれているよ。

●子ども (02) : でもサンタクロースは生きてなんかいないよ。

●子ども (03) : えー？ 生きてるよ！

●チゼック (03) : 最初のサンタクロースは司教様で、1500年前に埋葬されたんだよ。彼はリビア (Lybia) *^{ママ}の司教だった。

ここでチゼックは制作活動を促すために「サンタクロースが待ちくたびれている」と表現し、サンタクロースが仕上がり待ち望んでいるかのように機知に富んだ投げかけを企てた。しかし、子どもたちは「待ちくたびれている」ことの意味を「今も生きている」こととして捉えている。その結果、「生きていないよ」(02)であり、「えー？ 生きてるよ！」(03)とそ

それぞれのイメージが異なっていたためにイメージの対立が生じている。おそらく「生きていない」と答えた子どもは、すでに「夢のサンタクロース」の世界から離れはじめ、プレゼントを与えてくれる人はあのサンタクロースではなく、現実には両親であることに気づいている。あるいはいろいろな情報に触れるにつれ、サンタクロースの史実やレグENDAまで踏み込んで捉えているのかもしれない。この2人の子どもたちのやりとりに、チゼックは1,500年前に埋葬されたリビア (Lybia) の司教であることをつけ加えて締めくくった。彼は、サンタクロースの原型像とされる聖ニコラウスとの関連性に立ち入っていかにも伝説に即して子どもたちに語ったかのように思われる。しかし、ここには大きな解釈上の落とし穴が存在している。それを紐解くために、ここで聖ニコラウスのバラエティに富んだ伝説について幾つか簡単に整理しておきたい。関連図書を参考に聖ニコラウスについて、およそのところを部分的に要約、引用すると次のとおりである。(ただし、「」内は引用を意味し、下線は筆者による。)

(a) 航海、貿易を守護する聖人であり、小麦やパンを恵み、貧しい人々に施しをする聖者である。また時代を異にして同名の司教が数名聖者として崇められ、ついにニコラウスというまとまった聖者像となった。当世中世の人々の熱烈な聖者崇拜が溶解炉の中に溶かし、一つのニコラウス像を形成していた。(['ヨーロッパの神と祭り』¹⁰⁾)

(b) 聖ニコラウス (ミラノのニコラウスまたはバリのニコラウス) は326年歿。ロシアやヴェネツィアの守護聖人。ローマの没落貴族の三女のために財布を窓から投げ入れ助けたり、三人の学生を蘇生させたり、聖地への航海中に嵐をしずめたことなどの奇跡が伝えられる。中世では船員、婦人・子ども、または盗賊などに崇拜された。図像では司教服・三つの財布・三つ

の黄金の珠・三人の青年が描き添えられ、船や錨・子供・老人を象徴する。(['西洋美術の主題と物語—ギリシャ神話と聖書から—』¹¹⁾)

(c) 小アジア出身でミラという都市の司教。また嬰兒の頃、聖金曜日に乳を飲むことを拒み断食した。暴風雨を鎮めて船を救った伝説や、食用に塩漬けにされた子供たちを生き返らせた物語などがある。しばしば司教の冠と杖を手にし、3つの玉を持物とする。(['西洋絵画の主題物語』¹²⁾)

(d) 「聖ニコラスは、歴史家や聖人伝作家泣かせである。この聖人にかんする信頼できる情報は少ない。聖ニコラスは四世紀の人だといわれているが、九世紀になってやっと『ヴィタ・ペル・ミカエレム』(『ミカエルによる生涯』)のような作者不詳のギリシャ語の書物の中に名前があらわれる。その後、ヨハネス・ディアコヌスがラテン語で書いた『生涯』のなかに取り入れられ、さらにヤコブス・デ・ウォラギネ (一二九八年死亡) の『黄金伝説』にまた取りあげられている。その後、熱心な信者たちが善意のあまり、ミュラ (現在のトルコのデムレ) 近くのシオン修道院の院長でありピナラの司教でもあった、同名のニコラス (六世紀) の行なった奇跡を聖ニコラスのものと混同し、伝記の不明部分をおぎなった。こうして人びとの関心の深まりにつれ、聖人に特定的人格があたえられていったのである。(['サンタクロース物語の誕生』¹³⁾)

(d) ニコラウス、ミュラの (バーリの) Nicholas of Myra (of Bari)

キリスト教聖人の1人。子供、水夫、旅行者、年頃の娘の守護者。また、サンタクロースの原型となり、広く信仰された。しかしカトリック教会はニコラウスの素姓の事実関係の不確かさを理由に教会暦からははずす (1969)。「ただし、地方的な形で崇敬を続けることは許された。現

在彼について知られる唯一のことは、4世紀小アジアのミュラの司教であったということである。またその聖遺物は11世紀にイタリアのバーリに運ばれたという。伝説によればごく小さい頃から信心を表わしたらしいといわれ、誕生の日、産湯の盥の中で立ち上がって感謝の祈りをするように手を組んだり、乳飲み児の頃、断食の日には乳を飲まなかったという話が伝えられる。礼拝像では、通常は司教杖を手にした司教服姿の中年の人物として描かれる。持物は3つの黄金の玉か財布で、聖者の足元か書物の上に置かれる。…（中略）…ニコラウス伝の物語的場面は多数あり、その多くは彼が示した奇跡を行なう力について語っている。それらはゴシック期の大聖堂のステンドグラスやイタリア・ルネサンスのフレスコ画に見ることができる。」（『西洋美術解説事典—絵画・彫刻における主題と象徴—』¹⁴⁾）

(e)「中世以来、今日も人気ある聖人。史的事実はほとんど知られない。そのため1969年カトリック暦から除かれたが、国際的に知られている。小アジアのミラの司教となり、投獄されコンスタンティヌス大帝即位（324年）により許されて、ニカイア宗教会議（325年）にはアリウス派を攻撃、342年没。東方教会では早くから信仰厚く、西方へは10世紀頃に入り、12世紀以来、特にイタリアとロシアで人気があった。…（中略）…

〔図像〕ビザンティン美術では広い前額の白髻、無帽のギリシア司教姿で、福音書と二重横木の十字架を左手に、右手で祝福している。法衣には三位一体の刺繍がある。西方では司教冠、杖、華麗な法衣、手袋が描かれる。持物には三つの球が、本の上か足元か膝に置かれる。これは三つの財布の慈善を示す。3切れのパンは貧民への給食と三位一体の暗示である。」（『キリスト教美術図典』¹⁵⁾）

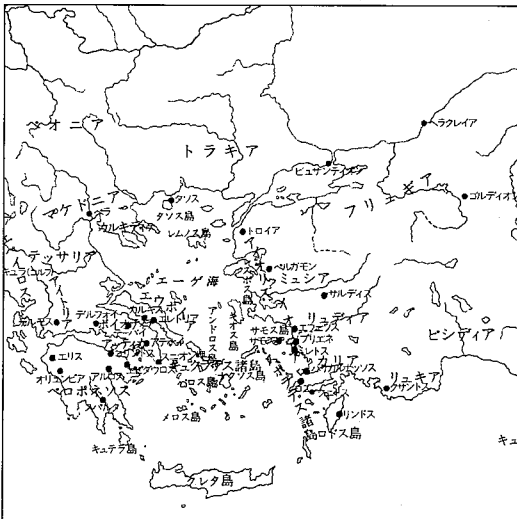
これらを見てもわかるように、聖ニコラウス

は一般に知られたキリスト教の守護聖人の一人であり、敬虔な信者によって多数の奇跡譚が作り出された。また絵画や彫刻の主題としても「聖ニコラウスの慈悲」「3人の児童」「ミュラの飢饉」「嵐を鎮める聖ニコラウス」「捕らわれた貴族の息子」など豊富である¹⁶⁾。記録に遺るすべての作者たち、つまり歴史家や聖人伝作家の意見が一致する内容とは、メシヤンの指摘に従えば、「この聖人はギリシャのパトラスで二七〇年ごろ生まれ、後にミュラの司教として慈善活動を行なったということ」¹⁷⁾だけらしい。チゼックが子どもたちに語った「1,500年前に埋葬され、リビア (Lybia) の司教であった」最初のサンタクロースとは、明らかにこの「聖ニコラウス」を指していることには違なさそうである。しかし、チゼックが子どもたちに語りかけたのは1935年の授業のなかでのことであり、単純に暦を逆算してみると1,500年前は西暦435年頃ということになり、「4世紀」に活躍した一般的な聖ニコラウス伝とは1世紀ほどの差が生じてしまう。結局、年代の指摘に関する疑問には、聖ニコラウスが「4世紀」ではなく「5世紀」に活躍したという内容を記した物語などを見出せるかどうかによってさらに検討が深められるべきであろう。

もう一点、「リビア (Lybia) の司教」という記述が理解困難である。リビア (Lybia) は北アフリカのリビア (Libya) と綴りが異なり、その他の地域や教区を指していると思われる。それにしても、なぜ彼は「聖ニコラウス」を語る時、一般的な「ミュラの司教」(Myra, Demre) を取り出さなかったか。なかでも「リビア (Lybia)」については、ヴィオラの「聞き取り違い」である可能性もある。もし、チゼックが古代ギリシア時代やヘレニズム時代に栄えた「小アジアの西南部地方の古代名」としてこの名称を語っていたとするとどうか。確かに古代名「リュキア (リキア) : (Lycia)」は「ミュラ」を含む地域名であり、チゼックがそう語ったのであれば、内容に矛盾は生じない。また、

小アジア西部の古代王国名・地方名には「リュディア (リデア) : (Lydia)」があり、それは「カリア」を挟んで「リュキア」は隣あわせとなっている^(地図①参照)。地名もしくは教区名「リビア (Lybia)」の問題は、授業中の対話を速記するという困難な過程の中で生じたヴィオラの誤解か、あるいは記録ノートから転記をする際の不注意にあったと考えることがもっとも理解しやすいのではなからうか。メシヤンが指摘するように、聖ニコラウスに関する信頼できる情報が少なく、いろんな伝説が存在している。チゼックはそのなかの幾つかの記述を思い浮かべたか、とっさの答えとして単に勘違いのレベルで語った内容なのか、あるいは記録者ヴィオラの記録ミスなのか、その他いろいろと考えられる場面である。

いずれにしても、子どもたちのイメージが拮抗したこの場面において、チゼックがとっさに対応しようとしたことは、「想像もつかないほど昔の大司教様が最初のサンタクロースであり、今日まで引き継がれてきていること」を説明しようとしたことであつたに他ならない。こ



(地図①)「ギリシア世界遺跡地図」(新規矩男・他編『ギリシア美術』大系世界の美術第5巻, 学習研究社, 1974年。)本地図は、本図書所収の(資料)歴史・遺跡地図より部分転載した。

れら二点の疑問についてはチゼック授業の分析と解釈という意図を考慮すると、あまりにも些末なことからであるのかもしれない。

またサンタクロースの衣装の「飾り」に関する指摘にも驚かされる。次のとおりである。

④ [豪華な飾りについて; CLV (1) より]

さて、サンタクロースが子どもだちのところに行くときは、彼は一番すてきな衣装を身につけていこう。彼はクランプでとめられた金色のロング・コートをまとっている。このクランプには金色の装飾が施してあるんだよ。

●子ども (32) : すごい模様だね!

●チゼック (24) : そう、飾りだ。だからサンタクロースはとても立派に見える。そのコートの内側は赤で裏打ちされているし、その下のシューズは純白なんだ。彼の靴はコートの下からほんの少しだけ見えるんだ。靴には金色のバックルがついている。私たちは実際に金色を使ってそれらをぬります。さあ、サンタクロースのコートに豪華な飾りをつけてあげよう。

⑤ [コートの中地について; CLV (1) より]

●チゼック (27) : 何を赤くぬるのかな?

●子ども (38) : コートの中地 (lining)。

●チゼック (28) : 赤であるはずのところに赤くぬりなさい。

⑥ [多い飾りについて; CLV (2)]

さあ、私は君たちが見ることができないように「クランプたち」の絵を隠します。君たちはまったくちがう「クランプたち」を描くんだよ。でも初めはサンタクロースを終わらせてしまおう。ほかにサンタクロースと関係あるものは何かな?

●子ども (01) : 飾り。

●チゼック (02) : さあ、もっと多くの色を取りなさい? 金, 銀, オレンジ, そして黄色。たくさんの黄色。

このようにチゼックはサンタクロースの衣装、とりわけコートを豪華に飾れるようにイメージさせた。金色のコートでクラスプでとめられるものであり、それには飾りがついている。裏地は赤である。そして純白のショーツを着て、金色のバックルのついた靴をはく。どこもかしこも、いたるところにすべからず豪華な飾りつけがなされたコート、金色に光り輝くコートのイメージを連想させてくれる。チゼックは「金、銀、オレンジ、黄」で着色してそのイメージに近づかせようとしたのだ。しかし、この衣装の豪華さは、近代的なサンタクロースの図像ではない。明らかに聖ニコラウスという司教の図像であり、あるいはさらに加飾された大司教の姿であるように思われる(図版②~⑥参照)。ヴィオラの記録した54回の授業には、「ニコラウス」という言葉は使われず、「サンタクロース」と「司教」のみが登場する。この理由はなぜだろうか。2つのことが考えられる。まず、1つはヴィオラがイギリスでこの記録を含んだ書籍*Child Art*を執筆、出版するにあたって、すでに英国では馴染みの深かった今日のサンタクロースの図像に合わせようとしたためではないか。「聖ニコラウス」を「サンタクロース」に置き換えたと推測されるからである。あるいは2つめとして、子どもたちにとって「聖ニコラウス」という特定の聖者の図像はイメージしにくく、日常のミサなどで目の当たりにする「生きた司教様」の方がイメージしやすいという配慮が働いていたと考えられる。「聖ニコラウス」の図像に拘れば、「司教冠」や「司教服」「司教杖」のほかに、持ち物である「3つの黄金の玉」や「3つ財布」(図版③)とか、「3人の子供たち」(図版④)が描かれることになる。そこまで厳密に聖書や図像上の約束事に縛られてしまうと、きっと子どもたちの想像力は萎えてしまっていたであろう。チゼックはそのところの勘どころをわきまえていたのかもしれない。それよりは、日常の「断片的な経験」として蓄積されやすい教会の司教様を具体的に取り上げる方がず

っと効果的であったと考えたのではないか。この後者の考え方は、作品のできばえの点から見て受け入れやすい。チゼックは作品の画面を埋めつくすことを造形上の、表現上の目標に位置づけているふしがあり、豪華な式典などで子どもたちが目にするであろう司教様の「豪華な飾り衣装」は、質素な姿よりもさらに適していたに違いない。こういう理由によって、チゼックは特定の「聖ニコラウス」の図像よりも、「豪華な衣装に身をつつむ司教や諸聖人」の図像を彼自身が対話のなかでイメージし、子どもたちのイメージと折り合いをつけるべく努力していたのではないかと考えるのである。

付記：なお、本稿は平成9~11年度交付のつぎの科学研究費補助金による研究成果の一部である。〔研究代表者：山田一美(80210441)・金沢大学教育学部(13301)、基盤研究(C)(2)、研究課題名：「教員養成系学部・大学院における教師教育のための美術教育実践の研究(09680252)」〕

■註

- 1) マクドナルド, S. 『美術教育の歴史と哲学』(中山修一・織田芳人 訳) 玉川大学出版部, 1990, p. 460.
- 2) Viola, W., *Child Art*, University of London Press, 1942.
- 3) Ibid., 2nd Edition, 1944, pp. 191-193. 及びヴィオラ『チゼックの美術教育』(久保貞次郎・深田尚彦訳) 黎明書房, 昭和51年, pp. 289-292.
- 4) 山田一美「チゼック授業の特徴を手がかりとした分析モデルの開発」『教科教育学研究第14集』第一法規出版, 平成8年, pp. 53-69.
- 5) 同上書, p. 64.
- 6) フランツ・チゼック展カタログ編集委員会(編)『美術教育のパイオニア—フランツ・チゼック展1865-1946』武蔵野美術大学, 1990.
- 7) 石崎和宏『フランツ・チゼックの美術教育論とその方法に関する研究』建帛社, 平成4年.

- 8) 柳宗玄・中森義宗(編)『キリスト教美術図典』吉川弘文館, 1990, p. 349には次のように説明がされている。「ひげ E.Beard. L.Barba. ローマ末期には無髯が一般化する。ケルト人はとくに長いひげで知られ, アングロ・サクソンは7世紀までは普通有髯であったが, ノルマン風化してからイギリス王たちはひげを落とした。カトリックの聖職者も無髯を常とした。しかし, 有髯が復讐の意味をもつ例が16世紀前半の教皇ユリウスII世やクレメンスVII世に認められる。」(傍線は筆者による。)
- 9) メシヤン, C. 『サンタクロース伝説の誕生』原書房, 1991, p. 12. フランス南東部サン・ニコラ・ド・ポールの大聖堂の聖ニコラス礼拝堂の祭壇右側の聖ニコラスの像は「黒ひげ」であり, 若いニコラスを表すという。
- 10) 植田重雄『ヨーロッパの神と祭(光と闇の習俗)』早稲田大学出版部, 1995, pp. 70-71.
- 11) 三輪福松『西洋美術の主題と物語-ギリシャ神話と聖書から-』朝日新聞社, 1996, p. 248.
- 12) 諸川春樹監修『西洋絵画の主題物語』美術出版社, 1997, p. 234.
- 13) 前掲書9), p. 20.
- 14) ホール, J. 『西洋美術解説事典-絵画・彫刻における主題と象徴-』河出書房新社, 1988, pp. 247-248.
- 15) 前掲書8), p. 263.
- 16) 前掲書14), p. 247.
- 17) 前掲書9), p. 20.

(資料1) CLV (1) 授業内容「サンタクロースとクラムバスをかく(その1)」

■1935年11月30日(土)

- チゼック(01): 今日、君たちはどんなすばらしいものを表したいかな? それを考えて私に話してごらん!
- 子ども(01): 女王様を表す。
- 子ども(02): 鉄砲を表す。それに兵隊さんたちと一緒に。
- 子ども(03): わかんない。
- 子ども(04): 人形のうば車を表す。「クラムバス」¹⁾を表す。
- 子ども(05): それから、サンタクロース。
- 子ども(06): 幼子キリスト。
- チゼック(02): クリスマスがくるのはもっと後なんだがね。
- 子ども(07): 窓を表したい。そこはサンタクロースが何かを置いてくれたところ。

- チゼック(03): 私たちは画台を持ちます。画台の長い方を下にして。それとも、回して違う方が好きかな?
- 子どもたち(08): すきじゃない!
- チゼック(04): こんなふうに画台を持ちたい人は? (画台の長い方を下にして示す。子どもたちは全員このようにしたがっている。)

- チゼック(05): 僕たちは真中で1本の線を上から下に引きます。これは壁だね。その壁の片側にサンタクロースが立ちます。そしたら壁のほかの側に――そこには誰が立つのかな? 「クラムバス」だ。用紙の中で窓に近い方²⁾にはサンタクロースが、そしてドアに近い方に「クラムバス」がいます。
サンタクロースはどんなふうに見えるかな?
- 子ども(09): マイター(司教冠) mitreをかぶっているよ。
- 子ども(10): それにロング・コートを着ている。
- チゼック(06): そうとも、ロング・コートだ。しかし、君たちは頭から始めなければならない。
彼の頭はどんなふうに見えるかな?
- 子ども(11): 人間の頭のよう。
- チゼック(07): 彼はどんな類の頭をしているかな。
- 子ども(12): とってもへんな頭。
- チゼック(08): 彼にはながーい あごひげと、白くて美しい髪の毛がある。
- 子ども(13): ちがう。そう思わない。
- チゼック(09): 彼は頭の上に何をつけているな?
- 子ども(14): マイター。
- チゼック(10): 君はマイターがどんなふうに見えるか知っているかい? でも君は説明するよりもっとうまく描くことができる。誰かマイターを説明できる人は?
- 子ども(15): はい。
- 子ども(16): はい。
- 子ども(17): はい。
- 子ども(18): 司教様みたい。
- 子ども(19): アーチがあって、下の方でくっついていて、それからつべんは十字形で、それからそれでせんぶ。
- チゼック(11): 私はもう君たちの邪魔をしません――描きなさい。頭から始めなさい。それからマイターを、それから残りのものをね。ではスタート! でも頭をあんまり小さくしないように!

- チゼック(12)(後で): 君たちみんなは用紙のつべん近くでマイターから始めなくてはならない――トルード(Trude)がしたようにね。真中からじゃないよ! でないと、ちっちゃいサンタクロースになっちゃうよ。
- チゼック(13)(ひとりの子どもに): 君は頭とマイターを表したね、でも眼と眉を忘れないようにね。
- チゼック(14)(もう一人の子どもに): 君はサンタクロースにアビシニアの皇帝³⁾のように黒ひげを付けたんだね。でもサンタクロースのひげは白いんだがな。

- チゼック(15): (後で) 頭を終わった人は? (ほとんど全員の子どもたちが手をあげる。) ある子はひげを2本の線で表しているが、それは十分でないね。全体の大きさを示せるように輪郭を描くべきだね。眼を描いた人は? (ほとんどすべて。)
- チゼック(16): 君たちは描き終わったというが、でもよく見ると何にもない。(1枚の描画を指さしながら) これはよい。しかし髪の毛が美しく白くもなっていない。それに言ったね。今は頭とマイターだけを表しなさいとね。君、そんなに急ぐんじゃないよ。――

あごひげは何からできているかな？

- 子ども(20)：毛から。
- チゼック(17)：髪の毛は1本1本分けて描くべきだね。

さあ、話を聴きなさい。私は全部の絵を見ました。ほとんどの絵はよいです。ですから次に行きます。頭につながるの何かな？

- 子ども(21)：首。
- 子ども(22)：首をあらわす。
- チゼック(18)：首の下には何があるかな？
- 子ども(23)：からだと腕。
- チゼック(19)：じゃあ、からだと腕を表します。――

ほかに何かからだにくっついているのは？

- 子ども(24)：あし(脚)。
- チゼック(20)：手です。まずは腕、それから手だね。そして手にはそれぞれ6本の指がついている。
- 子ども(25)：5本！
- 子ども(26)：7本！
- 子ども(27)：それぞれに5本の指がある。
- チゼック(21)：そのとおり、5本の指だ。もし例え誰かがもう1本の指を表しても――でもそれはたいしたことではないよ。サンタクロースのようにたくさんのもを手渡すには、ことによつたらもっと多くの指が必要だね。

腕は何をするのかな？

- 子ども(28)：ぶらさがっている。
- チゼック(22)：君たちはこのことについて考えなくちゃね。もしサンタクロースが何かを運ぶときには、ものを持って運べるだけの手を持たなければならないね。片手は何を持っているのかな？
- 子ども(29)：大きいふくろ。
- 子ども(30)：ぼくの(わたしの)の絵では、サンタクロースが杖(the staff)をもっていない。
- 子ども(31)：ぼくの(わたしの)はちがつてる。(幾人かの子どもたちが、終わったと言いながらチゼックのところに行く。)
- チゼック(23)：子どもたちは群がってきて、もう終わったという。しかし実際には何も終わっていない。――

さてと、サンタクロースが子どもたちのところに行くときは、彼は一番すてきな衣装を身につけていこう。彼はクラブでとめられた金色のロング・コートをもっている。このクラブには金色の装飾が施してあるんだよ。

- 子ども(32)：すごい模様だよ！
- チゼック(24)：そう、飾りだ。だからサンタクロースはとても立派に見える。そのコートの内側は赤で裏打ちされているし、その下のショーツは純白なんだ。彼の靴はコートの下からほんの少しだけ見えるんだ。靴には金色のバックル(buckles)がついている。私たちは実際に金色を使ってそれらをぬります。さあ、サンタクロースのコートに豪華な飾りをつけてあげよう。

(自分の絵をチゼックに見せている子どもに)君は用紙の全面を使ってしようずに描くんだよ。
(もう一人の他の子どもに)君はその飾りをもっと描き込まなけりゃね。

それから君たちは名前を書き入れなさい。右側の上隅に。右側ってのはドアに近い方のことだよ。――

急いで大まかな筆使いをしてはいけないよ。用紙の全面を注意深くかきなさい。幾人かは注意深くやっていないね。

- 子ども(33)：ぼく(わたし)は注意深くやってない？
- チゼック(25)：君はもう少し注意してやれるよね。たった1本の線には色をつけることなんかできないよ。2つの線に挟まれたところだけにぬれるんだ。だから2つの線を描かなきゃね。
(もう一人の子どもに)これはあまりにもごちゃごちゃすぎる(muddled)。注意が足りない。いつも注意しなければね。
(他のもう一人の子どもに)これはいい。ぬってもいいね。この子は進みが早い。――

足を描いた人は？(ほとんど全部)バックルの付いた靴を描いたかな？靴を金色でぬるんだから、それらを描かないとね。

- (ひとり子どもに)君は、ふくれて使えない足を描いたんだね。
(他のもう一人の子どもに)これは非常にうまくできたんだが、2本の線の間だけをぬることができると私は言ったね。

- 子ども(34)：ぼく(わたし)はもう線を2本描けない。
- チゼック(26)：いや、できるよ。

みんな聴いて！ 描画が終わった人はぬり始めてもいいです。今、赤色を渡します。

- 子ども(35)：終わった。
- 子ども(36)：ぼく(わたし)も。
- みんなが叫べ(37)：ぼく(わたし)も。
- チゼック(27)：何を赤くぬるのかな？
- 子ども(38)：コートの裏地。
- チゼック(28)：赤であるはずのところに赤くぬりなさい。(この間、助手が絵具と筆を配っている。)
- チゼック(29(後に))：さて肌と手をぬる絵の具を取りなさい。君はいま何を表わそうとしているのかな？
- 子ども(39)：顔と手。
- チゼック(30)：作品が終わった人は、ここで絵を見せませ(黒板の上で)。きょうは、全部の絵についてお話する時間がありません。もう4時だからね。君たちが課題をすすめるときは私の言うことをよく聴かなければならないね。私は君たちに課題を与えて君たちが考えるようになるよう教えます。私が例えば髪の毛を表しなさいと言ったら、君たちは飾りを表わすことに満足してはいけません。さあ眼を表そうと私がいったら、かきなくるのではなくて、まぶたのある眼、ひとみ、眼の部分部分の全部を描かねばなりません。私は、みんなの作品がゆっくりではあるがまた明瞭に適切に仕上がるように、つまりごちゃごちゃにならないようにじっくり指導するつもりです。ごちゃごちゃした作品では、私は嬉しくありません。次の時には片側を金と銀でぬり終えて、それからもう1つの側をはじめます。そして私がその時に手を描こうといったら、君たちは考えなくちゃね。手はどのように見えるかなって。さあ、おうちに帰ろう。

◆原著者注

- ・1)「クラムバスKrampus」とサンタクロースは12月5日の晩に子どもたちのところにやってくる。「クラムバス」は悪魔devilであり、サンタクロースは立派な司教様 bishopである。これは一種のクリスマスの予祝であり、ローマカトリック教諸国の子どもたちの実生活の中では一大行事である。サンタクロースはよい子どもたちのところには果物とお菓子をもってくる。「クラムバス」はいたずらな子ども達を鞭などで打つと考えられている。「クラムバス」と「ニコロ」Nicolo(オーストリアではサンタクロースと同じように呼ばれる)に変装した男達は、幼い子どものいる家族を訪れるのが常であった。そして商店、とりわけ菓子店は白いサンタクロースと赤い「クラムバス」でいっぱい飾られる。
- ・2)きわめて年少の子どもの幾人かは、疑いもなく左と右を知らないであろう。
- ・3)それはアビシニアン戦争(エチオピア戦争)の時期であり、子どもたちの皆がエチオピアの皇帝に驚くばかりに興味をもった。



・ (図版①)『聖ニコラウス』(19世紀頃) 民衆版画, フランス国立図書館蔵。ミウラの司教にして水夫の守護聖人であるニコラス像。若いニコラス(ひげはまだ白くない)の前方右下に3人の子どもが樽の中に、中央中景には船と錨が描かれている。(出典:C.メシヤン『サンタクロース物語の誕生』原書房, 1991年。)



・ (図版③)『3人の司教(ニコラス, ウルリッヒ, エラスムス)』(c. 1507) デューラー作。3人の司教の左隅が法衣をまとったニコラスであり, 手には本らしきものの上に3つ財布あるいは金が乗せられている。出典 [Kurth, W. (Ed.). The Three Bishops. The Complete Woodcuts of ALBRECHT DURER. New York : Dover Publications. 1963. (plate no. 202).]



・ (図版②)『モジャイスクの聖ニコラ』(15世紀), モスクワ, 木製, テンペラ, イルクーツク州立美術館蔵。主教(ギリシャ正教の高位聖職者)の衣装を着た聖ニコラの立像。右手に剣を立て, 左手に街(教会)を持っている。(出典:エレナ・ズプリイ(総監修)『イルクーツク州立美術館蔵15-20世紀のロシア美術“アイコンと絵画”』, 石川県立美術館, 1997年。)



・ (図版④)『オルガス伯爵の埋葬』(1586-88), エル・グレコ作。トレド, サン・トメー聖堂。(出典:吉川逸治(編)『ルーヴルとパリの美術-ルーヴル美術館(4)』小学館, 昭和61年。)司教冠を被った西方教会の偉大な博士聖アウグスティヌスが甲◎を身につけた伯爵の遺骸の頭部を, 聖ステファヌスがその脚部をかかえて身をかがめている。



・ (図版⑤)『ユピテルとその子供たち』(16世紀後半), タピスリー, 旧D. ボッカラ・コレクション, ブリュッセル。このタピスリーはブリュッセルで織られたもの。ドイツの一連の版画をもとに制作された1枚。図版中央には豪華な飾りの法衣をまとった「聖職者」, 為政者たちが並ぶ。右側には戴冠の場面が繰り広げられ, 高位の人々に囲まれて, 教皇が為政者に冠を授けている。為政者はスペイン国王にして神聖ローマ皇帝, ネーデルラント公であったカール五世 (1500-1558) によく似ているとされる。(出典: 国立西洋美術館編『「ヨーロッパのタピスリー」展カタログ』東京・パリ友好都市提携記念事業実行委員会, 1984, p. 6)



・ (図版⑥)『皇帝ナポレオン一世の聖別式と皇后ジョゼフィーヌの戴冠』(1805-07), ダヴィッド作, ルーヴル美術館。教皇ピウス七世を招き, ノートルダム大聖堂で行われた皇帝ナポレオン即位の儀式。最高位の「司教冠」「法衣」を見ることができる。(出典: 吉川逸治(編)『ルーヴルとパリの美術-ルーヴル美術館(5) オルセー美術館(1)』小学館, 昭和60年, 図版150.)